

伝文

日本口承文芸学会 会報

第59号 2016年10月発行

日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學文学部 花部英雄研究室

Tel : 03-5466-0224 (研究室)

Fax : 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail : info@ko-sho.org

都市語りの可能性

野村 敬子

『口承文芸研究』に同じタイトルの研究例会報告を書いたばかりである。そこでは八重山出身者における郷友会という思想について扱ったが、首都圏在住者が世代を超えて故郷の民俗芸能を今日的に継承する姿に感動した。各自が個々における母なる文化を持ち伝えて、自己検証をはかる現在座標が実に明確であった。

都市語りの楽しさは、首都圏で各人各様出郷当時文化としての母なる言語表現が個性的に表出、受容されることである。ちなみに私などは、その表現に聴き手として加担し、新たな口承文化の現在を創造構築する量り知れない喜びを味わっている。近時、日本昔話学会から依頼を受けての実践的参加「昔話横丁 by 『聴き耳の会』」は未知との遭遇にワクワクした。その一つが過去に埋没しかけた昔話を今日に呼び戻す作業としての、加藤嘉一、武藤鉄城、岩倉市郎の方言語りを試す営みであった。加藤は採集活動中、栃木から満蒙開拓少年義勇軍教学奉仕隊の一員となり渡満した教員、武藤は多くの投稿が柳田から創作と思われ無視されたとか、岩倉は喜界島のシマクチを共通語にせざるを得なかったという。いずれも過去の不運な資料が同郷の人によって声を回復していった。都市は多彩な言葉の海であった。

筆者は「上り列車で上京した方々の昔話」に注目し『澁谷ふるさと語り』『江戸川で聴いた 中野みつさんの昔話』を編んだ。中野さんは越後言葉で母親から聴いた幼児体験記憶を語り、近時は在住の江戸川区伝説も江戸川暮らしの言葉で伝える。都市語りには聴き手としての役目もある。口承文芸を現代都市に似つかわしい形で息付かせていく、新たな思考も挑戦も聴き手の役目ではないだろうか。研究者も聴き手の一人として知恵を絞っていくべきであろう。民俗社会の構成員と成らず上京した人々の境遇は各人各様、その内包する精神文化を都市語りの舞台上に花開かせる時、従来の民俗学的研究が持ち得ない口承文化研究の新たな切り口も見えてくる。佐久間惇一は柳田國男の指示を受け昔話採集をした折、山人の昔話は不要とあり、炭焼き・中野さんの母親からの聴き取りは中断し米農家・波多野ヨスミさんの集を纏めた経緯もある。現代都市は人間文化としての昔話を昔話として解放する。今秋、江戸川区郷土資料室50周年記念関連行事に「名主屋敷と昔ばなし～みつさんの昔語り」が行なわれる予定である。これこそ都市語りの学的実験に違いない。

(東京都)

「言葉の文芸を次代につなぐ—現代語り活動から考える—」

2016年3月26日、高千穂大学において、標記のテーマのもとに研究例会が開催された。渡部豊子氏、大西登貴子氏、立石展大氏の会員3名によるシンポジウム形式で行われた。

現在、昔話を語り=聴く場として一般的なのは、家庭内ではなく「民話を聴く会」や「おはなし会」の会場であろう。そのような場は非常に多く、語り手は年々増加し、活発な語り活動が行われている。これらの語り活動から次代へ語り継ぐ人達は出てくるだろうか。

最初の報告者、渡部氏（新庄民話の会会員）は、豊かな昔話伝承地に育ち、自らも伝承の語り手として活躍中である。「伝えたい、祖母の民話と生きる知恵」と題して、所属する「新庄民話の会」が発足当初から子ども達への伝承活動を重要と考えて実践してきた成果と課題を報告された。方言の問題や語る場所、主に学校の受け入れ態勢の問題、語り手の減少等が悩みとのこと。これは他地域の民話の会も同様であるという。氏が長年語り続けてきた小学校では子どもの聴く力が育ち、方言にも抵抗がないと言われ、「伝承することとは語り続けること」と明言された。最後に昔話「蟹っこ昔」を語っていただいた。

続いて、図書館員としてストーリーテリングを知り、その後、さまざまな語りに出会い、地域で語り続ける大西登貴子氏（當麻おはなしろうそくの会わらべ）が、「聴く楽しさ、つながる喜びを求めて」と題して報告された。昔語りや話芸を含む口頭の文芸を広く「おはなし」と捉え、子どもの文化史の中に「おはなし」を位置づける氏は、「子どもの本とおはなし」関連年表を用意された。新しい語り手たちが、どのように誕生し、連携して活動を広げ深めるに至るかの報告は興味深い。また、地元葛城の民話の伝承に取り組む意欲が述べられた。現代の語り手のレパートリーは幅広いが、その一端を語って紹介された。

最後の報告は、会場を提供していただいた高千穂大学の立石展大氏による「語り活動の現状と課題—小学生の語りを中心に—」である。冒頭、氏は幾つかの小学校・児童館・図書館等の「おはなし会」を見聞されて、その様子を映像で紹介された。学校によって語り手を受け入れる姿勢に違いがあること、特に上級生には時間的ゆとりが乏しいこと、語り手も多忙で依頼に応じきれない場合もある等現況を報告された。教師とボランティアである語り手とが「おはなし」を聴くことの本来の意味を理解し共有することの大切さ、聴くことの苦手な子どもも聴く回数を重ねれば、聴く力は育つとの語り手たちはの声も紹介された。近年、開かれた学校作りが導入されつつあることや、学校での「お話し会」が有効に機能するために公共図書館の果たす役割が大きいとの指摘は、これからの活動に活かされると願いたい。

会場との質疑応答の時間には、地域の民話（伝説等）を図書館で語るための有効な手立てについて、相槌をどのように考えるか、わらべ歌への言及など、語りの本質に迫る問題が出された。伝統的な語り方とは変わってきた現代の語り活動に対して、口承文芸学会としての知恵が期待される。

（愛知県）

阿部 敏夫氏「北海道の民間説話を探る」

北海道におけるアイヌ民族以外の人々、いわゆる「和人」の伝承の研究を続けてきた阿部敏夫氏による、「紅スズラン」を巡る創作伝説を軸とした講演。青木純二による「紅スズラン」に関する「創作アイヌ伝説」の和人社会における受容から、アイヌの伝承と和人の伝承における文化認識や美的意識の差を論じ、さらに1920年代の「和人によるアイヌ説話集編纂」が皇民化教育を背景としたものであったことを講じた。青木の「添い遂げられなかった男女の悲劇」が紅スズランの由来となったという創作物語をはじめ、スズランもしくは紅スズラン（ベニバナイチヤクソウ）を巡る「創作アイヌ伝説」は、アイヌの本来のものとは異なる文化認識で創作されている。和人にとってスズランは人気の高い花だが、アイヌ民族にとっては、あまり役に立たない毒草にすぎず、説話に登場しない植物である。これらの話は「可憐な白い花」であるスズランに対する和人的な美意識に立脚しており、それによって北海道の和人の間で現在まで「アイヌの伝説」として語り継がれるにいたった。これらの創作物語はなぜ本来のアイヌ説話と全く異なる文化認識で創作されたのか。青木純二や工藤梅次郎らアイヌ説話集の編著者は強い影響力をもった新聞記者であった。彼らはいわば皇民化教育を推進する立場にあり、アイヌ文化を「衰残」「旧習古俗」としてとらえていた。それがアイヌの文化意識に反する創作アイヌ説話の執筆の背景にあったと氏は指摘する。

氏の研究はアイヌ口承文芸研究にとっても刺激的である。アイヌの伝承と和人の伝承の接点についてはいくつかの視点がありうる。アイヌ口承文芸研究においては、金田一京助以降いわゆる「和人を主人公とするアイヌの伝承」（シサム・ウウェペケレ）など、和人からアイヌへの影響という視点での研究がいくつかおこなわれている。また、直接の影響関係は別とした、稲田浩二による瓜子姫型説話や「魚橋のツーク」を巡る話型の比較研究等がある。一方で「北海道において和人はアイヌの伝承をどう受容したのか」という視点からの研究は必ずしも多くない。アイヌ研究の立場からすれば専門外の「和人文化論」だからであろう。だが、「悲恋」や「可憐な花」を好む和人の美意識を抜きにして「現代日本におけるアイヌ口承文芸の受容」は語れない。複数の視点と資料による、北海道ならではの内容だった。（北海道）

林 晃平氏「亀甲の由来譚の二種—東アジアにおける亀の伝承の諸相—」

苫小牧駒澤大学林晃平先生の講演「亀甲の由来譚の二種—東アジアにおける亀の伝承の諸相—」は、「亀に乗らない浦島と亀に乗った浦島」という話題から始まりました。私の育った香川県の詫間町という所には浦島伝説があり、その意味でもとても興味深い話題です。

詫間町内には、当然のこととして亀に乗った浦島太郎の像がいくつかありますし、児童向けの絵本も浦島太郎は亀に乗っています。

ところが元禄四（一六九一）年の刊本『浦嶋太郎物語』に登場する浦嶋太郎の挿絵では、亀ではなく舟に乗って竜宮に行っているというのです。それが『鸚鵡籠中記』正徳二（一七一二）年四月二十七日記事では「浦嶋太郎釣をたれ、亀に乗り」とあるといひます。

また、浦嶋太郎が乗っている亀の絵が紹介されたのですが、その亀には必ず「牙」があり、必ず「蓑」がある。つまり浦嶋太郎は「牙」があり「蓑」がある亀にしか乗らないというのも、とても面白い話でした。『和漢三才図絵』『訓蒙図彙』の紹介もされ、『和漢三才図絵』にも蓑亀が「緑毛亀」として、『訓蒙図彙』には耳のある「毛亀」が掲載されていることも示されました。

こうした興味深い話題から始まった講演は、多くの図像・画像を駆使して、さまざまな亀の姿を紹介し、また、さまざまな亀の伝承を紹介して下さるものでした。（余談になりますが、南方熊楠が飼っている亀を苦心して蓑亀にしたことは熊楠の日記に記されています。）

こうした亀に乗った日本の先人たちは『日本書紀』『古事記』などに見られること、また亀の報恩説話は『日本霊異記』『今昔昔話集』などに見られ、中国や朝鮮の亀に乗った先人たちも紹介されました。

また亀のさまざまな姿を紹介した多くの「亀趺（石碑の下にある亀の形をした台座）」の画像も、たいへんに興味深いものでした。資料では多くの「亀趺から生まれた伝説」も紹介されており、古くから人間にとって亀がいかに身近で、またいかに特別な意味合いを持った存在であったのかということに改めて考えさせてくださった講演でした。

（東京都）

第40回日本口承文芸学会大会 公開講演

フンペシスターズ「アイヌの伝統歌謡の実演と解説」



第40回日本口承文芸学会大会 研究発表報告 1-1

米屋 陽一

藤井倫明氏「高野辰之の童話研究—未発表自筆覚書を手掛かりに—」

高野辰之（1876～1947年）は、大著『日本歌謡史』（1926年）、『増補改訂 日本歌謡史』（1938年）を残している。名曲「朧月夜」「故郷」などの作詞者としても知られている。その高野辰之の知られざ

る一面を藤井倫明は本発表で明らかにした。「高野辰之は童話研究に関する覚書の自筆ノートを残している、それによって断片的ではあるが高野辰之の童話研究と蒐集の方法を知ることができる」としている。「御伽話」を「童話」と「伝説」に分け、さらに①「人物譚」は「教訓譚」「風刺譚」、②「動物譚」は「教訓譚」「風刺譚」「由来譚」、③「神異譚」は「神異譚（神仙譚）」「妖怪譚」、④「座興譚」は「頓智滑稽譚」「落語一口噺」に分けている。「伝説」は①「勇士譚」②「世話譚」の二つに分けている。柳田國男の『遠野物語』（1910年）115～117番「昔々」と題目がつけられ、昔話が3話収録されている。その後、雑誌『昔話研究』（1935～37年）で、昔話分類案が示された。柳田は『日本昔話名彙』（1948年）、関敬吾は『日本昔話集成（1950～58年）、その増補版『…大成』（1978～80年）と刊行した。『遠野物語』の語り手・佐々木喜善が柳田國男に語ろうとしていた前夜に、高野辰之は「覚書自筆ノートの表紙に『瓜姫』。鬼の面。田螺の嫁様。日本の童話」とタイトルが書かれ、明治四十年（1907年）七月起稿と記していたのだった。「日本の近代的な伝承文学の分類としては現存する最古のものであり、伝承文学研究の黎明期を知る資料として貴重であることは間違いなく、伝承文学研究の歴史を知るうえで重要なものである」という藤井の指摘には首肯せざるを得ない。

永島大輝氏「首無し騎馬武者と日時についての一考察」

本発表の永島大輝は、「身体欠損のある動物の怪異」という基準で事例をあつめた。これに関しては収集の段階で昔話と分かる物は除いた。一七〇例程の事例中、三十事例が日付があった。しかし、そうした日付があるものは、首切れ馬に会ったという話はほとんどない」として、多くの文献資料と数少ない聞き取り資料を紹介しながら、論を展開させた。「日付」がある、「日付」が無いという視点から資料を分析し、「日付のある怪異は伝説的であり、日付の無い怪異は世間話的だと言えるのではないか。」「また日付のある怪異は物忌みなどの行事とも関係しており、知識はあるが実際に不思議な現象に遭遇することはないのではないか」と仮定した。そして、「首の無い馬は存在感が薄れ福井では首の無い柴田勝家に変化。」「一概に全ての馬の怪異の事例において日時のあるものが時代が古いものであるとは言えないだろうが、この場合はそういうことは言えるだろう」とまとめている。興味ある内容ではあったが、文献資料にかたより過ぎていないか。近頃、口承文芸研究と言いつつも文献資料が中心であったりする。文献資料であっても口承文芸資料が望ましいのではなからうか。むつかしい時代ではあるが、フィールドワークに時間をかけていただきたいと思う。「伝説」のみに固執しすぎてはいないか。「昔話」や「世間話」資料をなぜ除いたのか、疑問が残る。フロアからの意見もあったが、祭りや年中行事との関連をも視野に入れるなど、さらなる資料収集と検討を期待したい。
(千葉県)

第40回日本口承文芸学会大会 研究発表報告 1-2

関根 綾子

玉水洋匡氏「福島県二地域における長者伝説—長者伝説の生成と伝承の一考察—」

福島県郡山市（郡山地区）と二本松市（杉田地区）に伝わる「虎丸長者」伝説が、文献で取り上げられた理由と両地域での伝承の様相を考察した発表であった。「虎丸長者」伝説とは、「権勢を誇った

虎丸長者が、奥州征伐に來た源頼家から宿や食料を求められたが、断った。そのため、虎丸長者は源頼家に滅ぼされた」という、長者伝説である。

この伝説は、1800年前後から、日記や地誌類で繰り返り取り上げられた。玉水氏は、その理由を土地の歴史にあると指摘した。「虎丸長者」伝説の所在地は、郡山市も二本松市も、「延喜式」で定められた郡衙であった。二本松歴代藩主や松平定信は、この土地が郡衙跡を有する歴史ある土地であることを語り伝えるために、「虎丸長者」伝説を文献に記録したり、発掘を繰り返したのではないかと考察した。

また、両地域の現代の伝承についても言及した。郡山市の方は、虎丸長者ゆかりの馬頭観音の祭礼、「七日堂まいり」に関連して伝承されている。一方、二本松市の方は、屋敷跡の発掘が行われ、焼米や須恵器、瀬戸物などが発掘されたことにより、伝説が裏付けられ、伝承されている。

会場からは、「虎丸長者」伝説が近世の地誌に掲載されていることに関連した質問や、長者名がなぜ「虎丸」なのかという、名称に関する質問が出た。両地域を丁寧に調査しており、今後の展開が気になる発表であった。

山口建治氏「蘇民将來說話再考」

山口氏は『口承文芸研究』第37号で、日本古代の疫神「武塔神」とその後身の「牛頭天王」は、中国で信仰されてきた冥界の亡者「鬼」を管理する「五道神」がその原形ではないかと論じた。今回は、武塔神の初出、「蘇民将來說話」（『釈日本紀』所収『備後国風土記逸文』など）の原話を、中国の書物『酉陽雜俎』続集卷一の「旁イ（一十也）」説話（蚕王故事）に求めた発表であった。

「蘇民将來說話」は、「北海に坐す武塔神が南海からの帰途、日が暮れてしまったため、宿を求めた。弟の巨旦将来（巨端、巨丹、古端、古単、巨単、小旦とも表記する。『備後国風土記逸文』では「弟の将来」と記す）は裕福だったが、宿を貸さなかった。しかし、兄の蘇民将来は貧しかったが、武塔神を歓待した。数年後、武塔神は再び蘇民将来のもとを訪れ、子孫が家にいるかと尋ねる。蘇民将来が娘と妻がいると答えると、茅の輪を腰につけるよう告げる。その夜に蘇民将来の娘だけを助け、他の者はことごとく殺した。そして、武塔神は素戔鳴尊だと名乗り、疫病が流行ったら、蘇民将来の子孫と言って茅の輪を腰につければ免れると語った」という話である。これまで、「大歳の客」譚の一つとして考えられてきたが、山口氏はこの説話を「兄弟葛藤」譚として捉え直した。ストーリー展開や弟の名前から、「蘇民将來說話」の原話は「旁イ（一十也）」説話ではないかと説く。

ただし、素戔鳴尊が降り立った場所が新羅のソシモリであることや、養蚕と朝鮮半島からの帰化人との関連から、朝鮮から伝播したのではないかと考察した。謎解きのような、興味深い発表であった。

酒井正子氏「失われた歌を求めて—奄美と宮古をつなぐ「うずらの母」伝承—」

宮古諸島と奄美諸島では、「うずらの母」（「うずらんめ」）が唄われていた。「野火が迫った時に、母うずらは卵を守り、父うずらは逃げた」という前半部分は共通しているが、後半が異なる。宮古では、「父うずらが戻ると、母うずらは孵化した雛たちと楽しく暮らしている。父うずらは祝い酒を買ってきて、よりを戻す」という、母の強さを強調した歌詞である。奄美では、「母うずらは子と共に焼け死ぬ。それを見た父うずらは妻子の供養をする」という、悲しみの余韻を残した歌詞になっている。本

土に近い奄美では、本土から仏教的な無常観が伝わったが、宮古では、アララガマ精神（なにくそ、やっつやる）の高揚へと変わっていったのではないかとされている。

奄美の歌は、『奄美大島民族誌』に採録されたが、歌謡の伝承は途絶えてしまった。しかし今、「奄美初の民謡日本一」として知られている、ウタシヤの築地俊造が、池野無風の『奄美島唄集成』を基にしながら、「うずらんめ」を復元している。

歌詞を忠実に再現することも大切である。しかし、新たな解釈を加えながら継承していくことも伝承の一つのありかたなのかもしれない。伝承とは何かを考えさせられる、有意義な発表であった。

(東京都)

第40回日本口承文芸学会大会 研究発表報告 2-1

高木 史人

達 志保氏「文化資源としての伝説は寂れるか—宮崎県美郷町の百済王伝説の新展開—」

達志保氏には徐福伝説の研究等、大陸から日本に渡来したという人物にまつわる伝説の研究がある。今回も朝鮮半島から渡来したという百済王の伝承、宮崎県下のを紹介している。それにしても、「寂れるか」とはどういうことかしら。寂れるを手近な辞書で引いてみた。

さび・れる【寂れる・荒れる】（勢いの盛んだった所が）人気がなくさびしくなる。すたれる。

「—れた・町」（『旺文社国語辞典 第九版』）

これに従うと、「寂れる」は場所についていう語となろう。伝説が寂れるとは、伝説の物言いがすたれるというよりも、伝説の場所がすたれるということかな。

ところで、札幌に来るよりも前、勝手な想像をしていた。折口信夫の「歌の円寂するとき」を引き受けた題名かと思っていた。折口の短歌滅亡論——短歌は形式的には続くだろうけれども、短歌に盛られる内実は薄くなっていく、という論調が、伝説研究に応用されるのかしら、と。

けれども、達氏の題名は、フィールドの中で氏が拾った言葉に由来していた。

土地の人々が伝説を使って、町おこしをする。成功する。停滞する。それに対して、ジャーナリストの放った言葉。達志保氏は反発して、町おこしの人々の側に立って見せた。

ここが評価の難しいところだ。フィールドワーカーの立ち位置という古くて新しい問題が、迫り出して来る。海山の間「染まず漂ふ」のは、難しいいなみだけれども、フィールドワーカーは、どこかにああいう寂しさを保ち続けるのが必要だと、報告者は自分に言い聞かせてきた（※報告者の個人的な感想です）。

杉村裕子氏「スウェーデンの昔話の日本への紹介について—初期の再話者たちの仕事—」

もう一昨年前になるか、いわき明星大学で開かれた日本文学協会の研究発表大会に参加して、国語教育部会で研究発表をした。題して「「むかしばなしがいっぱい」か?」。手短かにいうと、小学校国語教科書に出てくる昔話教材の質に対する異議申し立てなのだが、現行教科書では外国の昔話を紹介する場合でも、ヨーロッパの、それもグリム昔話に偏っている。

ところが、事情は昔話研究をしている自分も、じつは同様であり、スウェーデンの昔話研究史を知らない。また、日本への紹介の歴史を知らない。松村裕子氏の発表は、だから、無知な私にとってまずは有り難かった。

重訳から始まった昔話紹介が、直接原語からの訳に切り替わっていくようすや、何人かの鍵となる日本人研究者、翻訳者の紹介がなされた。

その上で、われわれは、「ヨーロッパの昔話」と一括したり、「北欧の昔話」と一括したりするのだが、その中で「スウェーデンの昔話」と切り離す、その機微は何にあるのか（日本へのヨーロッパ昔話の紹介のされ方が次第に地域を狭めていくという説明もあった）というフロアーとの遣り取りは、面白かった。

たとえば、日本国内で、もしも、ある時期にそれまでの「日本の昔話」という括りから「東北の昔話」さらには「岩手の昔話」あるいは「遠野の昔話」等へと地域を狭めて紹介されていく傾向が見られたとするならば、そこには研究上どのような機制があるのかを研究史として押える必要があると同様に、それが出版など社会的な動きでもある以上は、社会的にどういう経緯がこれを引き起こしたのかを社会史、世相史的に探る必要が出てこよう、という空想をしてしまった。

(兵庫県)

第40回日本口承文芸学会大会 研究発表報告 2-2

大嶋 善孝

矢野敬一氏

「観光まちづくりの中の「商う芸」—新潟県村上市・日本酒小売店を事例として—

矢野氏は、商いの場でのコミュニケーション研究が香具師の芸などに限られて来たことを踏まえ、香具師と客のような一回限りの関係ではなく、顧客と継続的な関係を結ぶ事例について報告し、その特質を論じた。対象は、新潟県村上市の日本酒小売店の店主の商売である。

店主は、客が来店すると、店内の奥まった空間に招き入れ客をもてなすが、その空間が店の奥という点では裏の領域だが、より奥の店主の私的な領域から見れば表に属する両義的な空間であることを指摘した。そこで店主は冗談を交えつつ商品である日本酒の説明をし、目の前でユーモラスな色紙を描いて客に渡すが、店主は「字遊人」と自称している。

こうした商いは、山田宗睦のいう「乗せる—乗る」コミュニケーションであり、パーフォーマティブな客との相互作用であり、対面販売の戦略と見なせる。と同時に、客との「ふれあい」重視の姿勢のあらわれであり、「ふれあい」は村上市の観光まちづくりで強調されて来たものであった。それは、「ふれあい」の実践であり、観光との結びつきの中での対面販売のあり方を問い直すものだという。また、「字遊人」である店主の描くイラストは、相田みつをの世界にも通じるもので、こうした表現のあり方も口承文芸の重要な研究課題になり得るのではないかと指摘した。

口承文芸研究の可能性を広げる刺激的で有意義な発表であった。

熊野谷葉子氏

「マルチメディア資料集刊行に向けたフィールドワークのデジタル・アーカイブ作成モデル」

熊野谷氏は、自身が長年携わって来た北ロシアでの現地調査を中心に資料のデジタル化について発表した。

ロシアでは多くの大学にフォークロア講座があり、調査で得たデータを講座でデジタル・アーカイブ化している実情が紹介された。従来のように採録者が個人で調査ノートや録音などを保管し個別に論文を発表する場合に比べ、資料の死蔵や紛失を防ぎ、多くの研究者が資料を再検討する機会が得られる等の利点があげられた。日本の研究者グループによる北ロシアの調査では、録音・写真・メモ・録画等を相互参照できるデジタル・アーカイブをエクセルで作成し、複数の採録者がデータを共有できるようになったという。

調査成果の刊行もデジタル化を目指しており、ロシアの大学がDVDで販売しているマルチメディア刊行物が紹介された。上位の項目、その下に下位の項目がぶら下がるもので、ホームページのように検索しながら使用でき、テキスト・写真・録音等が相互にリンクしたものだという。

被調査者の肖像権・著作権の問題や発表者が作成したデジタル・アーカイブの保管場所について質問が出されたが、2015年の調査では承諾書を書いてもらい、ハードディスクに保管しているとのことであった。

調査データの保管・活用に悩んでいる多くの研究者にとってたいへん具体的で有益な発表であった。
(静岡県)

第40回日本口承文芸学会大会 研究発表報告 3-1

富樫 晃氏「地獄穴伝説に見るアイヌの他界観」

安田千夏氏「アイヌ樹木神伝承についての再考」

【お詫び】『伝え』59号は8月20日を原稿の締切日として、9月発行に向けて編集を進めておりましたが、再々度お願いしてきたものの、研究発表報告 3-1 の原稿をいただけませんでした。完全なかたちで発行できないこと、またそのために今日まで発行を遅らせてしまいましたこと、ここにお詫びいたします。
会報委員会

第40回日本口承文芸学会大会 研究発表報告 3-2

本田 優子

大谷洋一氏「アイヌ口承文芸で語られる河童について」

アイヌ口承文芸における河童は、アイヌ文化研究者のみならず広範な人々を惹きつける魅力的なテーマである。本研究は、先行研究の問題点を指摘したうえで、多くのアイヌ語テキストを読み込んで

分析し、新たな視点を打ち出した意欲的な試みであるといえる。

大谷氏はまず、従来の研究において河童のアイヌ語名称が多数掲出されているが、いずれもアイヌ語の知識を有しない研究者による誤った見解であることを批判し、確実性の高い名称は「ミントウチ」「ミムトウチ」「フントウチ」の3つであると述べた。

最も注目すべきは、神謡に登場する河童は「婿入り」に失敗し人間を溺死させる「化け物・魔物」であって、自らもカムイとしてアイヌから祭られようとはしないのに対し、散文説話に登場する河童はアイヌを支援・救助することで「カムイ」としての立場を得るという指摘である。文芸ジャンルの違いにより河童の描かれ方が大きく異なるという事実は、今後のジャンル研究の進展にも資するものであろう。また、和人から伝えられた河童は、散文説話の中で、アイヌの文化的要素を盛り込みつつ発展的に創造されたという指摘も、新鮮である。

惜しむらくは、当日の発表の際、先行研究批判に多くの時間が割かれたことにより、参加者の多くがこのような結論部分について十分に理解し、議論することができなかつた点である。『口承文芸研究』に掲載されるであろう論考に俟ちたい。

北原次郎太氏「アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討」

北原氏はまず、従来のアイヌ文化研究においては「文学の発生その他の文化史的な関心からシャマニズムに言及した研究が多い」と述べ、ト占や楽器・歌を全般的にシャマンと結びつけた知里真志保、久保寺逸彦、金田一京助らの言説を紹介しつつ、実際の tusu のあり方に注意が払われていない問題性を指摘した。そして、そのような事例のうち、アイヌ社会における日常実践として語られる諸儀礼・現象の発動原理・執行者の意識などについて整理・類型化し、それに沿って、文学中に描かれる事例を考察することを本発表の意図としている。

具体的には、様々な文献に記録されている超自然的行為・現象の発現事例を分析し、次のように類型化している。①神、神孫、死者が直接的に能力を行使する「非憑依型 a」、②動物骨（動物神）・祭具（物神）の力を借りる「非憑依型 b」、③人格占有／交替がみられない「憑依型 a」、④人格占有／交替がある「憑依型 b」。さらに憑依型 b の tusu（巫術）については、自律的な tusu1、他律的な tusu2、偶発的な tusu3 に分類している。

その際、膨大な日常実践の事例と文学中の事例を挙げているが、樺太と北海道の事例をともに丹念に収集していることが北原氏の研究の特筆すべき点といえる。

結論として特に注目したいのは、日常実践において tusu とその他の諸儀礼・現象を分けるのは人格交替を伴う憑依現象か否かであること、tusu に関わる憑神は、密着型でなく遠方から飛来する事例が多いこと、樺太、北海道とも文学中に描かれる tusu は人格交替を伴わない傾向にあることなどである。

従来、漠然と捉えられていた超自然的行為・現象を、整理・類型化した画期的研究であり、今後の深化に期待したい。(北海道)

シンポジウム報告「ユーラシアと日本列島：世界の中のアイヌ叙事詩」

今回の北海道大会におけるシンポジウムでは、課題として次の三点が提示された。

(1) 歴史的、類型的観点から、アイヌの英雄叙事詩はユーラシアにおいて独自の発展を遂げ、独自の特徴を持つものなのか。

(2) ユーラシアのさまざまな叙事詩には共通する性格、特徴、テーマなどがあるのか。それをアイヌの英雄叙事詩も共有しているのか。

(3) ほかの特定の民族の伝承と関連づけられるものなのか。

これを受けて、パネラーの方々の発表があった。次に内容を簡単に報告したい。

一番目は、奥田統己氏「アイヌ叙事詩における英雄像」だった。氏は、アイヌ叙事詩の英雄像に関するデータをこれまで蓄積された記録から提示しようとした。従来、「部落連合の総指揮者」として共通の敵と戦うという英雄像が説かれてきたが、一九七〇年代以降に報告されるようになった北海道各地の英雄叙事詩では、仲間のいない孤独な英雄と孤独な戦いが描かれているという。そして、「親との関係」「出生・成長」「結婚」「超人性・装束」といった点に分けて、アイヌの英雄叙事詩を紹介された。その上で、アイヌの英雄叙事詩の英雄は、ほかの説話上の神話的主人公と比較した場合、より孤独であり、幸福や名声、領土、財産などの獲得の投影に乏しいといえるという。

二番目は、荻原眞子氏「詠われる叙事詩の英雄・勇者たち」だった。叙事詩は詠われるものであることを各民族の民俗語彙から改めて確認した上で、シベリア諸民族の持つ叙事詩の類型を紹介する。大まかには、「古代的叙事詩」「古典的叙事詩」「英雄叙事詩」に区分できるという。そして、北方諸民族の英雄叙事詩について、これまでの研究から共通するテーマは「男と別に暮らす女」「女シャーマン」「ヒロインの成人」「ヒロインの婿探し」「女勇者の復讐」「若い勇者の成人」「勇者の復讐」「嫁の獲得」「氏族間抗争・部族戦争」であると述べる。さらに、アイヌの叙事詩を位置づけるために、アムール・サハリン地域のニヴフとツングース語系諸族の英雄叙事詩を検討することが必要であることを説き、それに登場する主人公が「孤独な狩人」であるという特徴をもつという。すなわち、「狩猟民の英雄叙事詩」という位置づけをされた。

三番目は、坂井弘紀氏「中央ユーラシアのテュルク叙事詩の英雄像」だった。中央アジアを中心として、各地に広がるテュルク系諸民族が持つ英雄叙事詩には、「神話的世界で活躍する英雄」「共同体や集団を敵から守る英雄」「歴史上実在した英雄」などがみられ、英雄にもさまざまなタイプがある。そして、その英雄の特徴として、「尋常ならざる誕生」「幼少時から示される特殊な能力」「人並みはずれた体格や技術」などがあげられるという。こうした特徴は、各叙事詩に基本的に共通しているという。発表では、「超自然的誕生」「特異な成長」「誇張して描かれる英雄」「英雄の援助者」「英雄の資質」といった点に分けて、テュルク叙事詩にみられる英雄の特徴を紹介された。

筆者は発表をお聞きして、これは当たり前のことかもしれないが、諸民族の英雄叙事詩を比較してその特徴を捉えようという試みは、基礎的なデータの蓄積と正確な分析の上になされる必要がある。「世界の中のアイヌ叙事詩」という課題は、今後も引き続き問われていくことになると思われた。

発表では、各パネラーが取り上げられた「孤独な英雄」という点に興味が引かれた。「集」に対する「個」なのか。精神的な「孤」なのか。仲間がいても疎外感を持つなど、さまざまなレベルがあるだ

ろう。荻原氏は「孤独」の意味として、両親がいない、知らない。兄弟がいない。家畜や犬さえいない。人との接触がないといった点をあげられていた。奥田氏のいう「人間関係が孤独」と同様なのだろうか。ちなみに、奥田氏は「目的・使命が孤独」をあげられていた。

(青森県)

第40回日本口承文芸学会大会 3日目 エクスカーション

アイヌ口承文芸伝承の現場を訪ねる—平取町二風谷訪問—



平取町立二風谷アイヌ文化博物館

ポロチセ（大きな家）にてカムイユカラ、ウエペケレを聴く

◆新庄民話の会

1986（昭和61）年、市の社会教育課の後押しがあり、地域文化のひとつ、新庄の昔話を後世に伝えていこうという目的で「新庄民話の会」が発足した。

現在会員22名、半数以上が語り手として活躍しているが、その中で男1名、女3名が伝承の語り手である。

会も昨年、結成30年を迎えたが、結成当時から子ども達への伝承活動を大きな目的としているので、

保育所、小学校は勿論、中・高等学校でも語り、要望によっては子どもの語り指導も行っている。また、名のとおり「民話の会」なので、読み聞かせや紙芝居のようなことはせず、昔話のみの会である。

2004（平成16）年には県の事業として市町村の児童育成「山形ふるさと塾（昔ばなし、郷土芸能等）」が発足したのと同時に、学校でも民話に力を入れるようになり、2006（平成18）年度から「新庄子ども語りまつり」を毎年開催している。

また、会の事業としては月一回の例会（協議、語りの研修等）、毎週日曜日、1時～3時まで「新庄ふるさと歴史センター・語りの部屋」の語り、県内外の民話の会との交流会、年二回、夏（七夕の夜）秋（10月）「新庄みちのく民話まつり」の開催。その「民話まつり」も昨年30回を迎えた。



2003（平成15）年、『新庄・もがみの昔ばなし』『新庄・もがみの伝説』の発行。2009（平成21）年には第1回から第15回まで民話まつりで語られたもので、未だ新庄で本にはなっていない昔話、早物語・かつちやま物語等500ページにおさめ『新庄・最上の昔話』として発行した。

会では、子どもへの伝承活動や言葉（方言）の問題、会員の高齢化と課題は山積みだが、なるべく昔からの行事、食べ物、豊かな方言を楽しみながら気負わず、子ども達に語り続ける、ただ語り続けることに使命があると私は考える。

「各地の語り・語り手・語りの場の紹介」は4回にわたってお届けしていく予定です。会員のみなさまからの情報をお待ちしております。会報委員会（達）まで。

事務局便り

○寄贈書籍 (2016年2月～2016年7月受け入れ)

- ・斎藤英喜編『神話・伝承学への招待』思文閣出版、2015年9月
- ・永井彰子『聖人・托鉢修道士・吟遊詩人 ヨーロッパに盲人の足跡を辿る』海鳥社、2015年10月
- ・梶濱亮俊『チベットの屍鬼四十七話』(上)・(下)、(株)テクネ、2016年1月
- ・畠山篤『岩木山の神と鬼』北方新社、2016年2月
- ・双葉会会長 阿部利一発行、編集協力 みやぎ民話の会『双葉町を襲った 放射能からのがれて 私たちの証言集』2016年3月
- ・丸田雅子・田中浩子・小池ゆみ子・小林美佐子編『遠野の昔話 菊地力松さんのむすめたちの語り』(株)企画室・コア、2016年4月
- ・鶴野祐介『日中韓の昔話 共通話型三〇選』みやび出版、2016年4月
- ・設楽博己・工藤雄一郎・松田睦彦編『柳田國男と考古学 なぜ柳田は考古資料を収集したのか』新泉社、2016年5月
- ・新潟県立歴史博物館『新潟県立歴史博物館年報』第15号、2015年11月
- ・新潟県立歴史博物館『新潟県立歴史博物館研究紀要』第17号、2016年3月
- ・『国立歴史民俗博物館研究報告』第196・197・200・201集、2015年12月、2016年1月～3月
- ・日本民俗学会『日本民俗学』第285・286号 2016年2月・5月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第48巻 10号～12号 2016年1月～3月、第49巻 1号～3号 2016年4月～6月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗』32 平凡社 2016年2月

○日本口承文芸学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學文学部 花部英雄研究室

Tel: 03-5466-0224 (研究室) Fax: 03-5466-0368 (日本文学資料室) E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP (<http://ko-sho.org>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。